別紙４

報告番号	※　　第

主　論　文　の　要　旨

論文題目	中学校教師が直面する生徒指導上の危機とそのサポート ―校内外の身近なサポート源の有効活用を目指して―
氏　　名	長谷 守紘

論　文　内　容　の　要　旨

【問題と目的】

今日の価値観の多様化，高度情報化，少子化などの時代背景の中で，学校を取り巻く環境は大きく変化してきている。また，現在教師の大量退職，大量採用が進み，世代交代の時期を迎えている。そのような中で，教育現場における各世代の教師にかかる精神的な負担は増加し，精神疾患による病気休職者も多い。教師バーンアウトを予防することは今日の教育現場において喫緊の課題となっている。

これまでの教師バーンアウトの研究動向を見てみると，バーンアウトの中核的要因には，教職の特質でもある職場内の人間関係における危機がある。特に，中学校教師は人間関係における危機の中でも生徒との関係における危機，つまり生徒指導上の危機をきっかけにバーンアウト傾向を強めていく場合が多いことがわかっている。また，危機を乗り越えたときには教師の成長につながることも指摘されてきた。

そこで，第 1 の課題として，生徒指導上の危機に焦点化し，現場の中学校教師がどのような危機に直面し，その危機をどう認知し，どのように対処したときに，どのような成長を果たしていくのかといった個人の内的な過程について質的研究法を用いて詳細に分析することを挙げる。その中で，第 2 の課題として，危機を乗り越える経験が与えるポジティブな側面に着目し，つまり生徒指導が成熟していく過程としてのキャリア発達をより詳細に検討することを挙げる。それによって，バーンアウトを予防するのみならず，キャリア発達を促すことができると考える。第 3 の課題として，生徒指導上の危機に直面した中学校教師を支援するために有効とされるソーシャル・サポートについて，どのような状況において，誰の，どのようなサポートが，どのように作用し，危機を乗り越え，危機から回復し成長に向かったのかといったプロセスを分析することを挙げる。実際には教員文化の中に脈々と内在化されている相互サポートが存在する。それを現象として記述することによって，生徒指導上の危機に直面した中学校教師のサポートの在り方を探ることができると考えた。

本研究では，生徒指導上の危機に直面した中学校教師のナラティブを手がかりとして，危機とそこからの回復のプロセスモデルを生成することを目指す。また，事例による検討も行い，効果的な援助のタイミングや成熟に至る認知的変容まで明らかにしたい。その上で，生徒指導上の危機に直面する中学校教師を校内外の身近なサポート源を有効活用したサポート体制の構築に向けて，提言を行う。

【構成】

第 1 章では，これまでの教師バーンアウト研究動向を概観し，そこからみえる現状と課題を明らかにする。第 1 章をうけ，中学校教師が直面する生徒指導上の危機に焦点を当てて，危機の進行や回復の過程で有効であったサポートの内容，危機が与えるポジティブな側面を検討するため，新人教師（第 2 章）と中堅教師（第 3 章）に分けて「中学校教師が直面する生徒指導上の危機と回復のプロセスモデル」を作成する。第 4 章では，一事例について 3 回のインタビューを行い，複線径路・等至性アプローチ(TEA)によって危機の進行の過程，援助のタイミングや成熟に至る認知的変容といったさらに詳細なプロセスを検討する。第 5 章では，第 2 章(新人教師)と第 3 章(中堅教師)で得られたモデルを比較しながら第 4 章までの知見をまとめ，その上で校内外の身近なサポート源を有効活用したサポート体制の構築に向けて，提言を行う。

【各章の概要】

第１章　研究の背景と目的

この章では，これまでの教師バーンアウトの研究動向を概観し，中学校教師が直面する生徒指導上の危機とそのサポートの現状と課題を明らかにする。今後の課題として 3 点を指摘した。1 つ目は，バーンアウトの中心的な課題である人間関係における危機を中心に，生活場面などの職場以外の要因や危機がもたらす教師の成長要因を多角的に分析し，質的研究法を導入することである。2 つ目は，特に，生徒指導上の危機に着目し，実際に現場の中学校教師がどのような危機に直面し，その危機をどう認知し，どのように対処したときに，どんな成長を果たしていくのかといった過程を詳細に分析した質的研究を行うことである。3 つ目は，サポート研究において，危機からの回復や乗り越えの過程を詳細に検討し，有効であった内的・外的要因やタイミング，そのときの被援助者の認知的変容を明らかにしていくことである。そうすることによって，バーンアウトを予防するのみならず，生徒指導が成熟していく過程としてのキャリア発達を促すことができると考えた。

第２章　中学校新人教師が直面する生徒指導上の危機と回復のプロセスモデルの生成

この章では，中学校新人教師が直面する生徒指導上の危機と回復のプロセスモデルを作成することによって，中学校新人教師が直面しやすい生徒指導上の危機や回復の過程で有効であったサポートの内容，危機が与えるポジティブな側面を検討する。Z 県公立中学校教諭 5 名を対象とし

て，中学校新人時代に直面した生徒指導上の危機についてインタビュー調査を実施した。分析はKJ 法により行い，「中学校新人教師が直面する生徒指導上の危機と回復のプロセスモデル」を作成した。

中学校新人教師が直面する生徒指導上の危機は，組織に及ぼす影響度が低いものの多領域にわたる場合が多く，深刻な状況に陥りかねない。その背景には職員集団の構成アンバランスや援助要請への抵抗などのリスク因が存在した。新人教師は，情熱をもって危機に立ち向い，脱人格化傾向を高め，バーンアウト寸前まで自分を追い込んでしまう。新人教師が出すサポート希求を捉え，危機の状況と危機に対する新人教師の認知に応じて，職場内の先輩同僚の道具的サポートと同世代同僚の情緒的サポートを行うことが有効であると考えられる。危機を乗り越えた経験は，現場に即した教育観・生徒観へ成熟を促し，後輩への援助志向を高めて教員文化に内在化される同僚性を育んだ。

第３章　中学校中堅教師が直面する生徒指導上の危機と回復のプロセスモデルの生成

この章では，中学校中堅教師が直面する生徒指導上の危機と回復のプロセスモデルを作成することによって，中学校中堅教師が直面しやすい生徒指導上の危機や回復の過程で有効であったサポートの内容，危機が与えるポジティブな側面を検討する。Z 県公立中学校教諭 4 名を対象として，中堅時代に直面した生徒指導上の危機についてインタビュー調査を実施した。分析は KJ 法を用いて，「中学校中堅教師が直面する生徒指導上の危機と回復のプロセスモデル」を作成した。

中学校中堅教師は，組織に及ぼす影響度が低いものから高いものまで複層的な生徒指導上の危機に直面していた。中堅教師は，脱人格化(回避型コーピング)を用いてバーンアウト傾向をコントロールするが，それは葛藤を生み出し，本質的自己の課題に直面することとなる。危機の背景には，ワークライフバランスの課題や責任ある立場として困難を１人で抱え込みといったリスク因が存在した。そのため，中堅教師のサポートには，個人とリスク因となる職場内外の環境との相互作用を意識したり，学校に潜在する支援的ネットワークを活性化させたりする必要がある。同年代の道具的サポートや管理職の情緒的サポートを受けてチームとして危機を乗り越えていった。その経験は，チームによる問題解決を志向させ，ミドルリーダーの役割獲得を促し，管理職へ向かっていくキャリア発達上の重要なターニングポイントであると考えられる。

第４章　校内外の身近なサポート源を有効活用して、生徒指導上の危機を乗り越えた中学校新人教師の事例

この章では個人に経験された時間の流れを重視する複線径路・等至性アプローチ（TEA） を用いて，有効なサポートのタイミングや成長に至る被援助者の認知的変容といった詳細なプロセスを検討する。そこで，径路の類型化を目指すのではなく，個人の径路の深みをさぐることができるように，分析対象を 1 名の教師に限定した。トランス・ビューを目指して，Z 県中学校教諭 D に再度協力を依頼し，合計 3 度のインタビューを行った。KJ 法に準じてカテゴリー化を行い，教師 D の「中学校教師が直面する生徒指導上の危機と回復のプロセスモデル」を図解化した。そし

て，図解したものに時間をインポーズし，等至点を「生徒指導上の成熟」に設定して，TEM 図を作成し，分析を行った。

小学校から中学校への異動 1 年目，新しい職場において，一から生徒や同僚との人間関係づくりに取り組まなければならなかった教師 D にとって，中学生に対するリアリティショック，同僚性の課題が最大の社会的方向付け(SD)となっていたと考えられる。教師 D が危機を回復していく分岐点(BFP)は，〈学年主任への報告〉と〈生徒との付き合い方を見直す〉ことであった。その分岐点に大きく作用した社会的助勢(SG)は，学年主任が普段から行ってきた教師 D との関係づくりと教師 D の生徒観を変容させる適切な介入であったと考えられる。教室復帰した教師 D は，生徒の気持ちを理解しようと懸命に取り組んだ結果，次第に中学生に対する理解を深めていった。また，危機を乗り越えたことで精神的な成長を感じ，苦しんでいる人の気持ちを理解したことが後輩への援助志向へつながり，生徒指導上の成熟という等至点（EFP）に至ったと考えられる。

第５章　総合考察

この章では，新人期と中堅期のプロセスモデルを比較しながらこれまでの章の内容をまとめ，生徒指導上の危機に直面する中学校教師を校内外の身近なサポート源を有効活用したサポート体制の構築に向けて，提言を行う。

第 1 に，危機後には成熟がもたらされるというポジティブな発想をもつことの重要性である。危機を乗り越えるにはソーシャル・サポートが重要な役割を果たしていた。そして，生徒指導上の危機を乗り越えた経験は，不確実性への対応を求められる高度な技法である職人性を高めることや教員文化に内在する同僚性を育むことにつながった。

第 2 に，リスク因と緩衝要因に着目した 2 つの働きかけを行うことの重要性である。1 つ目は，リスク因である援助要請への抵抗を低減するために，協働的職場風土を校内に普及させ，同僚との積極的交流を促す必要がある。2 つ目に，緩衝要因である校内のサポートを促進させ，有効化するために，L 型の関係性を同僚と築く必要がある。具体的には，タテの情緒的サポートを中心にヨコの情緒的サポートをする人間関係を構築することで，新人教師を有効的にサポートすることができる。ヨコの道具的・情緒的サポートを中心にタテからの道具的・情緒的サポートをする人間関係を構築することで，中堅教師を有効的にサポートすることができる。

今後の課題として，管理職やミドルリーダーがそれぞれの立場から危機に対するマネジメントを行うことの必要性と協働的な生徒指導体制を構築するため事前に研修を行ったりして危機に対する準備を行うことの必要性が考えられた。